

東都大学図書館通信(深谷キャンパス)

読書は心を養うためにある

～儒学者・佐藤一斎の教えです～

1. 「働く」を360度の視点で考えてみよう

企業内の研修事業を生業とする村山昇さんは「働く皆さんに健やかな仕事観をもち、より良い仕事人生を送ること」を目的として『働き方の哲学』を出版されました。村山さんは多くの企業内研修を重ねる中で「物事の捉え方に偏りがあると、健やかな仕事人生を送ることが難しい」という点に気づき、「働くことに関わる基本概念を360度の視点から見つめ直して仕事に対する健やかな心構えを養えば、物事の捉え方がある程度調整できるようになる(=より良い仕事人生が送れる)」と本書で述べていらっしゃいます。

哲学者・ニーチェは「この世に事実はない。あるのは解釈だけだ」と言い、世界的大ベストセラー『人を動かす』を書いたD・カーネギーは「何を幸福と考え、何を不幸と考えるか。その考え方方が幸不幸の分かれ目なのである」と言いました。その人がもつ概念や価値観で、どのように物事を捉え解釈するかによって生きる世界が決められている、と言っても過言ではないかもしれません。

「働くこと」について考えたい皆さんにお勧めの1冊です。これから社会に出る学生の皆さんにもきっと刺激になる本だと思います。



3. 言志四録(げんししろく)

今号の図書館通信のタイトルに用いた格言「読書は心を養うためにある」は、儒学者・佐藤一斎によって書かれた『言志四録』(『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志臺録(てつろく)』の総称)にある教えの一つです。『言志四録』は人間力を磨く学問として長く読み継がれ、かつて日本を動かした名だたる英傑たち(西郷隆盛や吉田松陰、坂本龍馬、佐久間象山、そして深谷の偉人・渋沢栄一翁など)はこの書に多くを学んだと言われています。中でも西郷隆盛は数ある書物の中で『言志四録』を最も愛し、特に印象深い101条を選びすぐり、『南洲手抄言志録』として残しています。

古い書物とレッテルを貼らずに、ぜひ一度『言志四録』を手にとってご覧ください。いま読んでも色褪せない、胸に響く教えがたくさん書かれています。学生の皆さんには医療職に必要な専門知識を習得すべく、日々勉学に励んでいらっしゃることと思いますが、併せて修養を積む大学生活が送れますことを心より願っております。

では最後に、佐藤一斎の最も有名な教えを『[現代語抄訳] 言志四録』の中から紹介しましょう(p.143より)。「少にして学べば、則ち仕にして為すこと有り。仕にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず」(現代語訳は裏面参照)。学びは一生に渡り、自身の宝になります。



2. 日本の古典をよむ⑫『徒然草』

『徒然草』は兼好(けんこう)法師によって書かれた隨筆(現代いうエッセイ集)で鎌倉時代末期に成立したと伝えられています。「つれづれるままに、日くらし観にむかひて…」の有名な一節は皆さんもご存じのことだと思いますが、兼好法師が記した日常の出来事や社会に対する鋭い批評は、約700年経った今でも瑞々しく、強く胸に響きます。

『徒然草』は序段を含む全244段からなりますが、この「段落分けをして読む」スタイルは江戸時代からで、もともとは明確な段落分けはされていなかったそうです。また『徒然草』というタイトルは兼好法師ご本人ではなく、後にどなたかによって付けられた作品名なのだとか。そして多くの方が『徒然草』の著者は「吉田兼好」とご記憶されていらっしゃることと思いますが、実は吉田という姓は後世につけられたもので、兼好法師が亡くなった後、血筋である上部(うらべ)氏が吉田神社(京都市)に仕えて吉田姓を名乗ったことから「吉田兼好」と呼ばれるようになったそうです。

時代を超えていまなお愛される人生訓『徒然草』。皆さんの不安や悩みも、兼好法師がスパッと解決してくれるかもしれません。



◆ 渋沢栄一翁が愛した言葉 ◆

日々新(あらた)にしてまた日に新なりは面白い、
すべて形式に流れる精神が乏しくなる、
なんでも日に新の心懸(こころがけ)が肝要である。

【『論語と算盤』理想と迷信】

日々を新鮮な気持ちで迎えることの大切さを説いています。
同じことを繰り返すだけの日々ではなく、楽しみ、心を動かしながら過ごす毎日こそ、人生を豊かにしてくれることでしょう。



※格言は『渋沢栄一 100の訓言』渋澤健・著/日本経済新聞出版社 p.48より転載

◆ 国家試験問題を解いてみよう ◆

看護師 車椅子による移送で正しいのはどれか。

- 坂を上るときは、背もたれ側から進む。
- 段差を上るときは、小車輪を浮かせる。
- 方向転換をするときは、小車輪を支点にする。
- 乗り降りをするときは、フットレストを下げる。



※ 問題はメディックメディア『QB 看護師国家試験問題解説 2022 付録

「第110回看護師国家試験問題&解説」p.46より出題(解答は裏面をご覧ください)



「静」と「動」を統合させた新たな図書館を目指して

～「空間」デザインの視点からの試み～

図書館長 佐藤典子

深谷キャンパスの皆様、この度、図書館長を拝命いたしました佐藤典子と申します。初めて本学1号館を訪れた時、自然の採光を取り入れた明るいエントランスと吹き抜けの高い天井、そして図書館のナチュラルテイストの机や椅子にとてもあたたかみのある良い印象を受けました。後に、1号館の建物が隈研吾先生の設計によるものと知り、都内にある先生が設計された美術館を思い出しました。建築家は、その建物を利用する方々が快適な「時間」を過ごせるよう「空間」をデザインしていくますが、本学の図書館は、曲線を描いた書棚を魅力的に配置してそこを訪れる方々に「静」の空間を創り出していると思います。

さて、私にとって図書館はどのような存在であったか今まで振り返ってみました。小学校低学年までは、虹の国を信じていた私の素朴な好奇心を満たしてくれる「空間」でした。中学年になると、学校の行き帰りに道端や畠でよく見るこの野草は何だろうなど知的な疑問に答えてくれる「空間」でした。そして高学年になると、江戸川乱歩やシャーロックホームズなど推理小説に夢中になり、論理的思考や洞察力、推理力を磨く「空間」になりました。中学校時代はスポーツに打ち込んだためあまり記憶がなく、高校生になると集中して受験勉強できる「空間」でした。大学と大学院時代は、その頃はインターネットがありませんでしたので、レポート作成や論文執筆のために専門書を借りる、国内外の論文入手する「空間」がありました。そして、今現在の私にとって図書館は、教育哲学や教育の歴史などについて学びなおしをすることのできる「心地よい空間」です。理論知と実践知が少しずつ統合されてきており、「学び続ける」ことの大切さを実感しています。

このように図書館は、年代や目的によってさまざまな利用の仕方ができる「空間」であると思います。現在、新型コロナウィルスのパンデミックにより、大学をはじめ学校教育現場において急速にICT活用の整備がされていますが、そのような時代にあった「コミュニケーション力」の育成が課題になっています。そこで、本学の図書館では、「伝える力の育成」や「学び合う楽しさ」を実感していただける「動」の空間も提供できるようにしたいと考えております。開学以来、これまで本学の図書館運営に携わってこられた全ての皆様に感謝の気持ちを表します。その功績を引き継ぎ、微力ではありますが、私にできることを精一杯させていただきたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

日本画家・東山魁夷(ひがしやまかいい)

皆さんは東山魁夷(1908-1999)という日本画家をご存じでしょうか。「国民的画家」の愛称で親しまれる東山氏は、優しく穏やかで安らぎのある作品を数多く残しています。今回は代表作品と呼ばれる3つの風景画を紹介いたします。

まず、東山氏といえば「道」という作品です。家族の死や敗戦の悲しみを乗り越え、己に向き合って生まれたこの作品は、東山氏の人生観を表していると言えるでしょう。「道」は戦後間もない頃に発表されますが、少しずつ明るい未来が見えてきた当時の人々の心情が、「道」という目の前から彼方へと続く道を描いた風景と重なり、多くの共感を呼んだそうです。この作品のモチーフは青森県の種差海岸と言われています。

続いて紹介しますのは「花明り」です。京都の風情を描いた「京洛四季」という作品の1つで、円山公園のしだれ桜をモチーフとしています。朧月(おぼろづき)とともに描かれた幻想的な桜の風景は、私たちを夢の世界へと誘ってくれます。「京洛四季」が誕生したのは、当時、東山氏と親交があった川端康成の声掛けがきっかけと言われています。「いまある京都を描いてほしい」—京都の風情が消えゆくことを憂えた川端康成は、そう東山氏に声を掛けたそうです。

そして最後に紹介しますのは「白い馬の見える風景」シリーズです。これは、風景画に人物や動物を描き添えることがなかった東山氏に新たな息吹をもたらした作品で、シリーズの1つ「緑響く」(下図参照)は原田マハ著『生きるぼくら』(徳間書店)の表紙を飾っています。モチーフになっているのは長野県茅野市にある御射鹿池(みしゃかいけ)で、実際の風景はどんな雰囲気なのか、思わず足を運んでみたくなりますね(コロナ禍が落ち着くまでお預けですが…)

こちらで紹介した3作品のほか、東山氏の作品の数々は東山魁夷記念一般財団法人のHP^{*1}でご覧いただくことができます。また、コロナ禍が収まりましたらぜひ長野県立美術館・東山魁夷館^{*2}を訪れてみてはいかがでしょうか。東山氏が描いた優しい風景画に、皆さんもきっと癒されるはずです。

(右) 東山魁夷『緑響く』長野県立美術館・東山魁夷館 *1 東山魁夷記念一般財団法人HP <http://www.higashiyama-kaijir.or.jp/dei.html> *2 長野県立美術館・東山魁夷館HP https://naga-noart.museum/higashiyama_kaij_gallery 参考文献: (1) 湯原公浩編『別冊太陽 日本のこころ 151 日本人が最も愛した画家 東山魁夷』平凡社 (2) 東山魁夷記念一般財団法人HP (3) 原田マハ著『生きるぼくら』徳間書店



◆図書館からのお知らせ◆

新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、ただ今サービスを一部縮小させていただいております。ご利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、何卒ご了承くださいますよう、よろしくお願い申し上げます

- 1.ご利用いただける方 … 学生・教職員のみ(滞在は最長90分)
学外者(卒業生含む)のご利用は当面停止
- 2.開館時間 … 月-金 9:00-20:00 ※土日祝は休館
- 3.サービス … 貸出・返却・複写・閲覧・座席利用(館内1Fで指定された場所のみ)・DVD 視聴(予約制/1日1本まで) 他
- 4.入館時のお願い … 入退館簿の記入・マスク着用・手指アルコール消毒・館内では3密を避ける・私語を慎む・状況により入館制限する場合あり
- 5.その他 … 返却図書は除菌作業のため3日間はお貸出しできません

「3.言志四録」(表面)で
紹介した「少にして学べば…」の
現代語訳はこちらです。

-----【現代語訳】-----

「少年のときに学んでおけば、壯年になってから役に立ち、何事かを為すことができる。壯年のときに学んでおけば、老年になっても氣力が衰えることはない。老年になっても学んでおけば、ますます見識も高くなり、社会に役立つこととなり、死んでからもその名は残る。(『現代語訳』言志四録 p.143より引用)

国家試験問題(表面)の正解は2.

※解説はメティックメディア『QB 看護師国家試験問題解説 2022 付録「第110回看護師国家試験問題&解説』p.140 を参照

躊躇(ツツジ)

「躊躇」は「てきちよく」とも読み、「立ち止まる、足踏みをする」という意味を持ちます。一説には「ツツジの美しさに人々が足を止める」ということから、この漢字が当てられたと言われています。

